明治学院大学　アジア神学セミナー　　2019年5月31日

「『日本的神学』の歴史」

原　誠

A、「アジア」と「アジア神学」について

1、はじめに、自己紹介

日本キリスト教史、セカンドメジャー　アジアのキリスト教

主要にはインドネシア、タイでのスタディツアー30年、その他中国、韓国、台湾、ミャンマー、マレーシア、ラオス、カンボジア、ベトナムなどの教会や神学校

帝国主義、植民地主義、西洋近代文明、科学技術(軍事)

現在も社会主義政権下、信教の自由が認められない国、あるいはイスラムが国教の国

「3つの目」　日本、アメリカ(欧米)、アジア

2、「アジア神学の概念規定という段階ではなく、次の段階が」、「アジアにおけるキリスト教の意義、展開の場としてのアジア」(徐正敏博士)

↓

誰が「アジア神学」という言葉を用いるか

概念規定とはいうものの、「アジア学」、多様、地域的、民族的、文化的、歴史的

一括りに「アジア」とはいえない、「アジア」の「多様性」

↓

いわゆる欧米のキリスト教が、帝国主義、植民地主義、西欧近代とキリスト教

アメリカの西海岸の神学、たとえば遠藤周作、アジア神学者?　水牛の神学、小山晃佑

↓

日本とタイ、それ以外は植民地の歴史

3、日本はアジアに属しているが、韓国、その他のキリスト教をまとめて「アジア神学」とはいえない　「コンテキスト」

森本あんり『アジア神学講義』、自分の母国で生活している神学者でなくアメリカで

4、「アジアというコンテキストのなかで、西洋由来のキリスト教がどのように受容・変容していったのか」(徐正敏博士)

↓

「テキスト」と「コンテキスト」という視点は重要

B、『日本的神学』について

1、「日本的キリスト教」

「日本」と外来宗教である西洋の「キリスト教」

明治初期第一世代のキリスト教受容、内村鑑三の「不敬事件」

明治国家の宗教的性格

キリスト教の日本的受容の諸相、国家主義的、文化的、教養的キリスト教の段階から

松村介石、西田天香(一灯園)など、一種のシンクレティズム（宗教折衷主義）
武田清子『土着と背教』(土着化論)
他方、主にアメリカの教派の宣教師による教派教会の形成、キリスト教学校、女子教育など、日本という「場」、歴史社会でいかにキリスト教が市民権を得るか、社会的認知を得ることができるか、熊野義孝「いまだ日本の神学は成立していない」(1960年代)
隅谷三喜男、「父なる神の信仰」、「子なる神の信仰」、「聖霊の神への信仰」
日本のキリスト教の受容過程、段階

2、明治以後の日本の宗教政策
国家神道、天皇、神聖にして侵すべからず、神社非宗教論
キリスト教は、この中でいかに市民権を得るか

3、ファシズム期の「日本的キリスト教」
「みくに運動」など　戦時下の日本の危機的状況の中で、凝縮して濃密に日本のキリスト教の意味、意義を弁証しようとした

C、戦後の日本社会とキリスト教
70年あまり　政教分離、信教の自由
近代日本、2度の「外圧」　強いられた「開国」　強いられた「民主化」
近代市民社会の基礎である、個人に基礎づけられた市民社会
今あらためてキリスト教、しかも福音の宣教という場合の「福音とはなにか」を問う
「テキスト」と「コンテキスト」という視点
魚木忠一　　「宗教的体験」「触発」

（参考資料）
日本的キリスト教　　1930年代に現れた、キリスト教の教説を日本的伝統と様々な方法で関連づけて理解しようとする試み。当時日本の支配層は国内の経済的危機を乗越えるために中国侵略に乗出し、更に日中戦争、太平洋戦争へと突入、国民の精神的統合を図るために、非常時、国体明徴、皇道精神の振興を唱えた。多数の日本共産党幹部の転向が伝えられ、近代の終末や超克、日本への回帰が論じられ、日本の古典、神道、その他の歴史的伝統を再評価し、そこに自己の精神的根拠を見いだす傾向もみられた。それに伴い、キリスト教を外来宗教として排撃する一方、その日本化を求めて国策に奉仕させようとする動きも現れた。この相矛盾する社会的風潮の中で、キリスト教指導者の中にはキリスト教を日本民族の精神的伝統と積極的に関連させて理解し、これを説き明かすことによって、キリスト教の自己弁護を行おうとした者もいる。日本的キリスト教はその所産であるが、その関連づけは必ずしも一様ではない。例えば、キリスト教と日本的なものの間に共通項を見

いだし、それを手掛かりに両者を積極的に混合ないし習合させる、それとは逆に両者を分離させることによって日本的なものを手放しで肯定して称賛する、あるいはキリスト教を日本的なものを支えてこれに奉仕するものとして意義づける、などである。また、その活動方法も多様であった。皇国観念とキリスト教の神の国に関する教説を結び付けて教会の内部批判と革新運動を進めようとしたみくに運動、肇国の精神に基いて救世軍の万国本営からの独立を求めて反対ないし消極的な勢力を攻撃した山中豊吉らがあるが、一般的には、日本的キリスト教の提唱者が講演・パンフレット・定期刊行物・単行本によって啓蒙活動を行い、共鳴者を得て運動を進めていった。代表的著作は、椿真六(真泉)「日本精神と基督教」(34)、原戉吉「日本人の神」(35)、佐藤定吉「皇国日本の信仰」(37)、同『皇国信仰読本』(38)、同「日本国体と基督教」(44)、関根文之助『神ながらの道と基督教』(38)、*比屋根安定『基督教の日本的展開』(38)、大谷美隆『国体と基督教』(39)、今井三郎『日本人の基督教』(40)、藤原藤男『日本精神と基督教』(40)、同『日本的基督教』(42)、魚木忠一『日本基督教の精神的伝統』(41)、同「日本基督教の性格」(43)などである。(以下、略)

『日本キリスト教歴史大事典』　(土肥昭夫)

佐藤定吉　1887.11.20-1960.12.23　独立伝道者。徳島県富岡町出身。東京帝国大学工科に入学。1910(明治43)年本郷(＊弓町本郷)教会で海老名弾正から受洗。14(大正3)年7月東北大学教授、24年3月退職。同年8月、5女慈子の死によって「全東洋を基督へ」の召命を受け、26年月刊誌『科学と宗教』創刊、東京下落合に産業宗教協会を設立し、信者の企業のコンサルタントになる。27(昭和2)年5月イエスの僕会運動を開始し、8月軽井沢千ヶ滝に第1回浅間山麓修養会を開いた。28年4月から月刊誌『暁鐘』を創刊し、全国的に熱烈な宣教活動を展開。伝道地域はさらに国外にも広がり、29年1月第1回米国伝道旅行を試み、シアトル、ロサンジェルスなどでリヴァイヴァルを起した。その後も数回にわたって米国、華北、満蒙に伝道旅行を試みている。太平洋戦争勃発の頃から彼の信仰は急速に皇国主義的になり、イエスの僕会は解散され、代って皇国基督会を発足させた。これはすでに、僕会信条の第5条「我等は基督教の日本化運動を以て我国体の発揚に勉め、真の愛国的皇室中心主義は神中心の生活に在りと断ず」、また第9条「我等は東洋意識に立脚せる精神維新の完成を期し」という言葉にも見られる日本的・東洋的精神主義の発露であった。戦後も神道や皇国神学の研究に没頭。　(抄)　『日本キリスト教歴史大事典』　(中沢洽樹)

今泉源吉　1891.3.24-1969.6.5　みくに運動の指導者。埼玉県浦和に生れる。肺患と闘いながら、1922(大正11)年東京帝国大学法学部を卒業。在学中から中渋谷教会牧師森明の薫陶を受け、彼の学生伝道に協力して帝大学生基督教共助会、キリスト教女子協愛会などの発展に尽力した。森没後、中渋谷教会牧会主担者に就任。27(昭和2)年宗教法案の議会提出にあたり、反対運動の第一線に立って活躍。特にその違憲説が傾聴され「日基の理論家中の理論家」と称された。29年議会提出の宗教団体法案反対運動の後で、神社問題に苦しみ、同年

7 月中渋谷教会を辞し、11 月東京帝大大学院に入学。「明治政府の宗教政策」を研究した。また森の友人高倉徳太郎の福音的キリスト教に傾倒し、30 年結成の福音同志会の中央委員として、教会や神学校の改革問題について高倉に助言した。同志会解散後、34 年 1 月創刊の『信仰と生活』の同人となり、公同運動にも参加したが、非常時局とともに年来の皇国主義を抑え難く、35 年 1 月から「みくに」を創刊し、国体とキリスト教の融合一致を図り、この運動を「みくに運動」と称した。(抄)『日本キリスト教歴史大事典』(藤巻孝之)

松村介石　1859.11.9 (安政 6.10. 15)-1939.11.29　伝道者。安井息軒に儒学を学び、16 歳のころ神戸でアッキンソ J.L.より英語と聖書とを学ぶ。1876 (明治 9)年横浜のバラ学校に入学し、住吉町(横浜指路)教会で受洗。80 年築地大学校の舎監を務めるかたわら、築地の東京一致神学校で学ぶが宣教師と衝突して退職・退学。82 年岡山の高梁(たかはし)教会牧師を務めた後、「福音新報」や『基督教新聞』(のち『基督教世界』)の編集に従事。87 年押川方義の推薦で山形英学校教頭に就任。のち 89 年 3 月内村の後任教頭として北越学館に赴任。また学内に北光会を組織して、月刊誌『北光』の刊行に尽力。しかし、特定の宗教を強制せず、校則、礼拝などを撤廃したため、宣教師や信徒たちとの対立が絶えず、ついに 91 年 12 月辞任。その後 97 年まで神田の基督教青年会館の講師として活躍。一時は内村鑑三、植村正久と共に「三村」と並び称された。晩年は一種の総合宗教を目指す道会を組織した。(抄)
『日本キリスト教歴史大事典』　(本井康博)

魚木忠一　1892. 7.31-1954.12.10 神学者。同志社大学神学部教授，文学博士。同志社大学神宇部、ユニオン神学校、マールブルク大学神学部に学び歴史神学を専攻し、ユニオン神学校でも学ぶ。神学思想史上の特色は、ディルタイの影響を受けてキリスト教精神史を唱道し、またハルナックやゼーベルクの影響を受けて類型論を展開したところにある。キリスト教体験を重視し、その体験に裏付けられた神学思想について研究し思索した。先達に倣ってキリスト教精神史におけるギリシア類型、ラテン類型、ローマ類型、ゲルマン類型、アングロサクソン類型を主張したが、先達を超えてアジア類型の成立を主張した。(略)アジア類型とは、仏教、ヒンズー教、イスラム教、儒教などを信奉する諸民族が、どのようにキリスト教精神によって触発されるかというテーマを課題とする。日本人においては、仏教、神道、儒教などの宗教的伝統を踏まえながら、どのようにキリスト教精神によって、すなわち福音によって触発されるかがテーマとなる。(抄)
『日本キリスト教歴史大事典』　(藤代泰三)